

第五惑星アスカ③

む げん わく せい
夢幻の惑星

六道 慧



富士見ファンタジア文庫

イラスト



富士見ファンタジア文庫

だいごわくせい
第五惑星アスカ③

むげん わくせい
夢幻の惑星

平成元年11月20日 初版発行

著者——りくどう けい
六道 慧

発行者——中井茂雄

発行所——株式会社富士見書房
〒102 東京都千代田区富士見1-12-14
電話 03(261)5375(代表)
振替 東京7-86044

印刷所——旭印刷

製本所——多摩文庫

落丁乱丁本はおとりかいたします
定価はカバーに明記してあります

©Fujimishobo 1989, printed in Japan
ISBN4-8291-2333-8 C0193

第五惑星アスカ③
むげん わくせい
夢幻の惑星

33



富士見ファンタジア文庫

10-4

口絵・本文イラスト 高田明美

目次

第一章	失われた光	5
第二章	星 ^{せい} 母 ^ぼ	34
第三章	ノア計画	72
第四章	聖 ^{せい} 櫃 ^{ひつ}	124
第五章	パンドラの民人	170
第六章	無限 ^{むげん} の輪廻 ^{りんね}	216
エピローグ		243
あとがき		253

第一章 失われた光

暗黒の宇宙が広がっていた。視界を過ぎるものは何もなく、暗闇だけがただ果てしなく広がっている。

おそろしいほどの静寂、想像を絶する暗黒。

太陽が漆黒のピロードのような宇宙の遠景に沈み、月の背後から、きらきら輝く青と白の宝石が現れた。たとえようもなく荘厳な瞬間が、スローモーションのように長く続く。

ゆるやかに渦巻く白いベールをまとった、明るい、微妙なスカイブルーの球が、暗黒の神秘の深い海の中を、小さな真珠の玉のように、次第に昇っていった。

地球の出、とても呼べばいいのだろうか。それは、月から見た地球の光景だった。

ここは……シドは、ゆっくり周囲を見まわした。彼は、ノーマ・アシュレイによって閉

じこめられた明日香の意識を追って、彼女の精神内に入りこんだのである。これは彼女の意識が記憶している光景だった。

地球は、宇宙の闇に浮いている、クリスマスツリーの飾り玉のようであった。明日香が愛してやまない、碧い星。もうひとつの故郷。

アスカ、どこにいる。

シドは無限に広がる空間を、進んで行った。蛍のような隕石が、暗闇を背景にしてチカチカ輝いた。大気のかなたに広がるのは、虚無と暗闇だけである。

地球がだんだん遠ざかっていく。とうとうビー玉ほどに縮んでしまった。想像できないほど美しいビー玉である。美しく、あたたかく、そして生きている。それは非常に脆くて壊れやすく、指を触れたら粉々に砕け散ってしまいそうだった。

アスカ。

底知れぬ暗黒の空間を漂流し、シドは彼女を見つけた。探すのに時間はかからなかった。明日香が還る場所は、そこしかなかったからである。

火星と木星の間。かつて、もうひとつの碧い星が在った空間に、小さな青い球体が浮かんでいた。サファイアのような光輝を放ち、ピロードの闇の中を静かに漂っている。

明日香はその球体の中で眠っていた。母の胎内にいる赤子のように身体を丸めている。



銀色の髪が身体を覆い、淡く輝いていた。青と銀色の美しい球。

(アスカ……)

と、シドはつぶやいた。

夢にまで見た愛しい少女が、自分の目の前にいた。その手を離れたことを、何度悔やんだことだろう。行かせたくはなかった。どんなことをしても、金星に留まらせたかった。苦い悔恨の日々、一日とて忘れた日はない。

(アスカ)

シドは青い球に両手を当てた。トクン、トクンと、小さな鼓動が響いてくる。

(アスカ、わたしだ)

シドの「声」を聞いて、銀色の髪がゆらめいた。球体の中でサワサワと動き始める。少女の白い裸身が、小さく震えた。

(アスカ)

もう一度、シドは言った。明日香はかすかに顔を動かした。顎をあげ、ゆっくりと目を開く。碧く光るふたつの宝石が、じっとシドを見つめた。

電流にうたれたような衝撃が、シドの身裡を貫き走った。初めて出逢った日と同じ、強烈な印象。「愛夢」の少女にやっと逢えた……。

（アスカ、わたしだ）

シドは大きく両手を広げた。

（君を迎えに来たんだ。さあ、おいで）

と、微笑みかける。

（……シド？）

明日香は、いぶかしげに問いかけた。彼がここに来たのが、信じられないという顔だった。なぜ、シドがここにいるのかしら……。

（わたしの心は少しも変わっていない。愛している、アスカ）

その言葉で、明日香の張り詰めていた表情が崩れた。青い殻がパチンと弾け飛ぶ。瞬間、光の洪水があふれ出した。青く輝く光の帯が、宇宙の闇の中になめらかに溶けこんでいく。あふれる光の中で、二人は固く抱き合った。頬に頬をすり寄せ、口づける。二人を包む青と銀色の光が、力強く、躍動的に変化していった。

待ち望んでいた出逢いのとき。

離れていたふたつの心、引き裂かれていたふたつの魂が、今、ひとつに結ばれようとしていた。

人形のようにだった明日香の顔が、少しずつ表情を取り戻してきた。凍てついた碧い瞳に生気が甦ってくる。

美しい蠟人形に魂がふきこまれたようだった。硬い表情がほぐれ、口もとに笑みが浮かぶ。

「アスカ」

シドは辛抱強く、名前を呼んだ。明日香の瞳に、食いいるような視線を注いでいた。

「……シド？」

うつろな目の焦点が合い、光を取り戻した。不思議そうに小首を傾げている。

「気がついたか」

耳をくすぐるシドの声。

「シド？ え？ 私……」

明日香は、きよろきよろと周囲を見まわした。淡いブルーで統一された、美しい部屋の中だった。やわらかな光が部屋を満たしている。明日香はソファの上に座っていた。隣には碧いアストロスーツを着たシドがいる。

「わたしがわかるか、アスカ」

「ええ、シド」

明日香はなんの考えもなく、うなずいた。彼女は「愛夢」を視ているのだと思っていた。悪夢の後に必ず訪れる、もうひとつの哀しい夢。この夢が醒めれば、シドはいつものように消えてしまうだろう。

「よかった」

と、シドは安堵の吐息を洩らした。

「まったく……君には驚かされる。だが、無事でよかった」

彼は明日香の手を、きつく握りしめた。あたたかい手、掌を包むぬくもり、伝わってくる懐かしい心の波。

明日香は首を傾げた。夢の中にしてはリアルすぎる感覚だった。これは、もしかしたら……。

「シド！」

びっくりして立ち上った。

「こ、ここはどこ？ 私はいったい……」

狼狽しきっていた。どこでどうなったのか、まったくわからない。なぜ、目の前に本物

のシドがいるのだろうか？　これが夢ではないとしたら、何が起こったのか。

「落ち着いてくれ、アスカ。今、説明しよう」

昔ながらの静かな口調、確かにシド・レイ・ゴデイスだった。

「でも、シド……」

と、言いかけて、明日香の脳裏にレイたちのことが浮かんできた。

そうだ。私はカニンガムに捕まって……いけない。たいへんだわ。早く助けに行かなければ！

「シド、お願い、これを外して。私、レイと鷹士を助けに行かなくちゃならないの。みんな捕まってしまったかもしれない。ねえ、早く」

明日香は額の「輪」を指さした。縋るような目でシドを見上げる。

やれやれ、というように、シドは首を振った。

「頭がはつきりしたとたん、また飛び出して行くのかい、アスカ。わたしとは、まだ挨拶もかわしていないというのに」

多少、恨めしげであった。銀色の瞳が妖しく輝いている。

時が流れても、その魅力には少しも変化がなかった。いや、さらに増しているようにさえ感じられる。明日香はどきまぎしながらも、けんめいに言った。

「レイたちが死んでしまうわ。お願いよ、シド」

「かれらは無事だ。君がわたしに救^{なす}けられたことをレイは感知し、魔王^{マダ}を連れて逃げた。子供たちとともに、吹^{フク}き溜^{ウミ}まり」近^き辺に潜^{ひそ}伏^{ふく}している。これで安心したかい？」

「逃げた……」

明日香は尻^{しり}もちをつくように、すんと腰^{こし}を下ろした。ほっとしたとたん、身体から力が抜^ぬけてしまった。みんな無事なのだ。よかった。

「少しはわたしと話してくれる気になったかい？」

と、シド。皮肉^{くにく}っぽい口調ではあったが、本心ではなかった。ふたつの目は優しい色をたたえている。

「話？ そうだわ。ここはどこ？ なぜ、あなたはここにいの？ いつ、地球に來たの？ どうやって私を……」

「ストップ」

シドは素早く言った。

「あわてなくていい。ひとつずつ、順を追^つって説明^{せつめい}しよう。まず第一の答え。ここはわたしの天船^{テンセン}の中だ。すでに地球を離れ、金星に向かって航行^{かうこう}している」

「あなたのヴィマナですって！ それに金星に向かつているってどういうこと？」

「金星人たちを説得するためだ。かれらの靈力をひとつにするために」

「金星人たちを説得？　なぜ、そんなことを……」

「君はゲイルとひとりで闘うつもりなのか、アスカ。地球の人々を、いわば人質に取られた形で、彼とまともに闘えると思っているのか？」

「……………」

明日香は、ぐつと唇を噛みしめた。シドの指摘は正しかった。自分ひとりではどうにもならない。ゲイルの組織力は巨大だった。

「君ひとりではとても勝負にならない。正直なところ、〈幻者〉たちの靈力を貸りてさえ、危うい状況だ。しかし、君は諦めてはいない。そうだろう？」

「もちろんだわ」

明日香はきっぱりと言った。

「まだ五パーセントの救いが残っている。それがたとえ一パーセントになっても、私は諦めない。必ず地球を、いえ、もしかしたらアスカも救えるかもしれないのよ。その可能性に賭けてみるわ」

「それでこそ、わたしの『愛夢』だ」

シドはにやりと笑った。明日香の頬に口づける。シドの体温を間近に感じ、明日香は思

わずどきりとした。

「どうして地球へ来たの、シド。なぜ？」

問いかける声が、うわずついていた。心臓の鼓動が異様に早くなってくる。

「君の鳥船に異変が起きたことに気づいたからだ。アステカで君はゲイルに襲われただらう？」

「ええ」

「あの日、君のヴィマナからのSOSをキャッチしたわたしは、すぐにフネを回収したんだが……しかし、君は乗っていないかった。トニイも誰も」

「それじゃ、私のヴィマナはあなたが？」

「そうだ。あれは緊急事態が発生すると、自動的にワープするようインプットしてある。

君に万が一のことがあった場合を想定して、セットしておいたんだ。よけいなことだったかもしれないが、そうせずにはいられなかった。アルヴィラの願いでもあったしね。あの後、わたしはすぐに地球に来て君を探したが、見つからなかった」

シドの声音には、熱い思いがこめられていた。

わたしの心は今も変わっていない。

トランス状態で耳にした言葉が胸に甦り、明日香は頬を染めた。彼の瞳はその心を、隠